

「派出婦」の登場

— 両大戦間期における〈女中〉イメージの変容 —

“Hashutsufu” Came In

:Modification of the Image of *Jochu* (housemaid) between the Two World Wars

清水 美知子*

Michiko SHIMIZU

抄 録

本稿は、両大戦間期の日本における〈女中〉イメージの変容を、第一次世界大戦後に登場した「派出婦」（＝家庭などに出向いて家事手伝いに従事する臨時雇いの女性）に焦点をあてて考察するものである。

第一次世界大戦後、都市部では女中不足が深刻な社会問題となりつつあった。女中が見つからない、居着かない。そんな女中払底への対応策のひとつとして打ち出されたのが「派出婦」という臨時雇いの女中のシステムである。1918年、東京・四谷に「婦人共同派出会」が設立された。派出婦は、申込者の依頼内容に応じて適任者が派遣されるしくみ。賃金は従来の女中にくらべると割高だが、必要なとき必要なだけ雇えるという利点もある。「派出婦」はその後、家庭の手不足を補う労働力として、都市部を中心に急速に広まっていった。

女中になることを“奉公に上がる”といったように、日本の女中は行儀見習や家事習得という修業的な性格を有していた。これに対して派出婦は、雇用期間や勤務時間、仕事内容が前もって決められるという点で、従来の女中とは大きく異なった。そこには“修業”という側面はない。主従関係から契約関係へ。「派出婦」の登場により女中は、“職業人”としての第一歩を踏み出すことになったのである。

1. はじめに

筆者はここ十数年、戦前期に発行された新聞や雑誌をおもな資料として、日本における〈女中〉（個人の家庭で家政一般の仕事をおこなう女性の使用人）イメージの変容に関する研究にとりくんでいる。これまでの研究からは、①明治半ばごろまでの女中はいわば“奉公人”であり、雇い主と雇い人との関係は、人格も含めて身ぐるみ抱え込む主従関係であったこと。②それが1900年前後から、女中の側に意識変化が目立つようになり、女中の確保や使役法が無視できない家庭問題として浮上してきたこと。③そして第一次世界大戦後、私的領域の一関心事にすぎなかった女中の問題が、社会問題とし

* 関西国際大学人間学部

てひろく認識されるようになったこと、などが明らかになった¹⁾。

両大戦間期の〈女中〉イメージの変容に大きな影響を及ぼしたと思われるのが、第一次世界大戦（1914～17年）後に登場した「派出婦」である。派出婦は、おもに個人の家庭に出向いて家政一般の仕事（炊事、洗濯、掃除、買物など）に従事する臨時雇いの女性のことで「家政婦」ともいう。第二次世界大戦前は、旧職業紹介法の「営利職業紹介事業規則」（1927年制定）で職業紹介対象者とされた。派出婦は戦後、職業安定法により有料職業紹介事業の職種のひとつ「家政婦」として許可され、現在に至っている²⁾。

本稿では、両大戦間期に発行された女性向け雑誌や新聞の記事、派出婦に関する調査報告書、女性向けの職業案内書をおもな資料として用い、①「派出婦」はいかなる経緯で登場したのか、②また、「派出婦」として働く女性の労働実態はどのようなものであったのかを明らかにするとともに、③「派出婦」の登場により、〈女中〉イメージがどのように変容したかについて考察したい。

2. 「派出婦」の登場

2. 1 「派出婦」登場の背景

【女中払底の時代】

「数年このかた東京の中流以上の家庭で、女中払底の嘆声がますます盛んに聞こえるようになりました」。このような書き出しではじまるエッセイ²⁾が雑誌『婦人世界』に掲載されたのは、1913（大正2）年のことであった。筆者は、家政学や女子教育関係の著書を数多く出版し、女中の使い方にも詳しい下田歌子。明治期にはもっぱら女中を使う心得や方法を説いてきた³⁾彼女が、女中そのものが得られないという状況を論じている点が注目される。

“女中払底”は大正から昭和戦前期にかけて、新聞や雑誌においてひんばんに取り上げられたテーマのひとつである。女中払底の事実はすでに明治30年前後から見られたが⁴⁾、その傾向は大正期になると加速した。表1は、東京市職業紹介所における女中の求人・求職状況の推移を示したものである。女中の入職ルートは、親戚や知人、出入りの商人などの口利きや桂庵・口入屋など民間の職業紹介業者の斡旋のほうが多数を占めていたから⁵⁾、公共職業紹介所の調査データは女中の需給関係の一角をあらわしているにすぎない。とはいうものの、すでに大正初年から求人超過に陥っており、とくに第一次世界大戦（1914～17年）のあと、求人数に対する休職者数の比率が20パーセントを割った点は注目される。1923（大正12）年に30パーセントを快復しているが、これは関東大震災という特殊な事情によるため、以後、昭和の時代に入っても、女中払底は慢性的に続くのである。

第一次世界大戦の終わった翌年の1918（大正7）年、雑誌『婦人公論』1月号に「現代婦人の悩み」というエッセイが掲載された。筆者は平塚らいてう。7年前に『青鞥』を創刊し“新しい女”として世間の注目を浴びた彼女が、今は家庭婦人の代表として、女中払底にあえぐ生活ぶりを切々と訴えている。ここではその一部を紹介しておこう⁶⁾。原文の旧字・旧かなづかいは新字・新かなづかいになおし、読みやすくするために句読点をくわえている（以下同じ）。

「派出婦」の登場

表1 東京市内の求人数・求職数

年 次	求 人 数	求 職 数	求職／求人 (%)
1912 (大正 1) 年	248	163	65.7
1913 (大正 2) 年	367	165	45.0
1914 (大正 3) 年	356	180	50.6
1915 (大正 4) 年	396	214	54.0
1916 (大正 5) 年	553	215	38.9
1917 (大正 6) 年	200	52	26.0
1918 (大正 7) 年	1,218	271	22.2
1919 (大正 8) 年	1,814	297	16.4
1920 (大正 9) 年	2,439	393	16.1
1921 (大正 10) 年	5,365	860	16.0
1922 (大正 11) 年	10,478	2,404	22.9
1923 (大正 12) 年	15,559	4,883	31.4

資料出所：『国民新聞』1924年9月9日付より作成。

いわゆる近代文明がもたらした産業革命は、今日、遂に私達の家庭から、私達の家庭において必要な——家事一切の雑務から子供の世話まで主婦や母を助けて、若しくは代ってしてくれた必要な助手である女中というものを、工場の方へ奪ってしまいました。……(中略)……今や至るところで「女中払底」の声は多くの主人達を、わけても家事と育児の労働以外に、なお他の労働に従事する主人達を苦しめつつあります。現に私の家庭でも、ここ2、3カ月前に女中を失って以来、未だに代わりのものを見つけることが出来ずに、毎日毎日苦しんでおります。女中を失った私は、もう自分の仕事どころではありません。2つと4つになるふたりの子供を見ながら炊事も、掃除も、洗濯も時々裁縫もしなければなりませんから、私としてはもうこれだけのことで手一杯で否、手にあまるほどで、終日、食事の時を除いては坐る間もありません。

女中がいなくなるとたちまち生活に窮するという訴えは、現在の感覚からするとかなり大げさに聞こえる。しかし、たらいと板を使つての洗濯、かまどや七輪による煮炊き、箒やはたきを使つての掃除など、当時の家事は衣食住いずれをとっても、今日とは比較にならないほど手間ヒマかかるものだった。らいてうのように幼い子どものいる核家族世帯や主婦が職業をもつ家庭では、女中なしには生活が成り立たないケースも珍しくなかったのである。

女中払底の影響をもっとも大きく受けたのは、都市部の新中間層の家庭であつた。女中志望者の多くは、仲働きや小間使など奥向きの仕事のある“お屋敷”を希望し、炊事や洗濯、子守など何でもやらねばならない“一人女中”の家庭を敬遠したからである。「屋敷の小間使や高尚な召使いになれば、希望は相変わらずありますが、品格・容貌・衣類とこの三拍子が揃わねば落第ときまっておりますのに、その落第しやすい希望者ばかりが多いのだから驚きますよ」というのはお屋敷専門に女中の周旋をおこなう桂庵の番頭⁷⁾。「御飯炊きがなくて困ります。お心当たりがございましたら何とぞお世話を…」主婦たちの集まりでは、こういう会話が交わされることも珍しくなかった。

また、“お目見え泥棒”や“住み込み泥棒”など、悪質な女中に苦い思いをさせられるトラブルもあとを絶たなかった。1917（大正6）年6月29日付の『都新聞』には、次のような読者からの投書が掲載されている⁸⁾。

記者様、永年の間使っていた女中が病気で暇をとりましたので、桂庵へ口を掛けておきましたが、当節は女中が払底で連れて参りません。そこで新聞へ広告して若い女中を置きました。身元引受人は府下の渋谷にいる人で某省の小官吏という事でした。私は調べもせずに証文をしまつて置きました。4、5日たって、夕方、ふとその女中の姿が見えなくなりました。女中部屋を調べますと、持ってきた風呂敷包が見えないのみならず、娘の洗濯物の単衣が2枚、櫛道具や外出用の下駄も見えないので、さては持って逃げたのだとわかりました。そこですぐ人を身元引受人の許へ遣わしましたら、その町名番地の処にはそんな人は住んでいず、交番所まで煩わせましたが、とうとう知れず仕舞いになりました。

では、いったいなぜ女中が不足するようになったのか。大ざっぱに言って、その原因は3つにまとめられる。

第一は、第一次世界大戦をきっかけとする産業化の進展により、女中以外の職業機会が増えたことである。たとえば、1905（明治38）年に発行された木下省眞『女子の新職業』（内外出版協会）というガイドブックに掲載された職業は、内職的なものを除けば11種類にすぎなかった。それが、1924（大正13）年の佐瀬文哉『文化的婦人の職業』（自光社出版部）において取り上げられた職業は、内職・自由業的なものを除いても50種類以上にのぼっている。新しく登場した職業のなかには教育や技術の修得が必要なものも少なくなかったから、すべてが女中に代わる選択肢となり得たわけではない。しかし、職域が拡大されたことにより、女中の人気は相対的に低下した。

第二は、大正期に入ってからの中中間層の急激な増加である。たとえば、東京市における職員の全就業者にしめる比率は、1908（明治41）年に5.5パーセントであったのが、1920（大正9）年には21.4パーセントと4倍近くにも拡大した⁹⁾。こうした人びとの家庭が新たに女中の雇用層にくわったことも、女中払底に拍車をかけたといえる。

第三は、住み込み女中という仕事が魅力に乏しくなったことである。女中の賃金は一般に、額面において他の職業にくらべると安い。家賃や食費、交通費がかからず、衣服等の雑費も節約できることを考えれば、実質的には女工と大差はなかった。にもかかわらず女中志望者が減るのは、長時間の拘束やプライバシーの欠如、因襲にとらわれた人間関係が嫌われたからにほかならない¹⁰⁾。

【生活難の時代】

第一次世界大戦は、日本に経済的好況をもたらし、いわゆる戦争成金があらわれた。いっぽうで、物価は上昇し、それに追いつかない賃金によって庶民の生活の窮乏化がすすんだ。たとえば、東京市内の物価指数は1914（大正3）年を100とすれば1909（大正8）年は333と3倍以上に沸騰している。これに対して賃金は、100（1914年）に対し255（1919年）の上昇にとどまる。また、東京第一

高等女学校の調査によれば、1914年から19年のあいだに、三等米1升18銭から52銭に、みそ1貫目32銭から1円に、木綿1尺1銭7厘から7銭に、豆腐1丁2銭から4銭に値上がりした¹¹⁾。当時の新聞や雑誌には、いわゆる“生活難”への対応策として、家事の片手間にできる手内職や副業の案内とともに、簡易生活の実行案がしばしば掲載されている。1918年7月、富山県の女仲士たちが米の積み出しを実力で阻止したことに端を発する“米騒動”は、わずか2カ月足らずの間に各地に拡がり、1道3府38県、約500カ所におよび、70市町村で軍隊が出動する騒ぎとなった。

生活難がとくに深刻だったのは、新中間層の多数をしめる下級官吏や小中学校教員、会社員などのサラリーマン家庭であった。たとえば、夫婦と子ども5人、女中1人からなる小学校教員の妻は、月給40円で8人が暮らす生活の窮乏ぶりについて、次のように語っている¹²⁾。

40円のうち毎月色々な名目の下に控除されて、主人が受け取る現金は37円余。主人はそのうちより必要な費用を引き去りますので、実際私の手に落ちます金は33円余。うち2円半は雇人に渡し、なお不時の備えとして1円乃至1円半は郵便貯金に入れますから、残りは28,9円となります。この収入で8人の暮らしを立てねばなりません。しかしそれは本年(1919年——引用者)4月以前の実況で苦しい内にも3月迄はそれで済ませました。これは高いと申してもなお米が安かったお陰であります。4月になりました。これまで尋常小学校に通っていた娘は、高等女学校に入りました。女学校となれば学資の要り目が大したものであります。入学させたものの、このままでは学資支弁の見込みが立ちませぬ。そこで一切の苦痛を忍んで先ず断行したのは、雇人の解放と貯金の中止であります。5月になりました。物価は日一日と騰貴して参ります。雇人の解放と貯金の中止くらいでは追いつきませぬ。それで今度は永年続けてきた生活の程度を、思い切って引き下げ、にわかに非常な粗食を始めました。もちろん私は覚悟の前であります、子ども等の食いかねる様子を見ては何ともいえぬつらい思いがいたします。6月になりましたは、いよいよ生活の脅威に堪えかねて、貯金の引き出しを始めました。7月には貯金の残りがいくばくもありませぬ。ことに生活難の嘆息談が頑是なき子供の耳にも入りまして、正直一片の長男などは自らすすんで減食を申し出るなど、腸も切れるような感じがいたします。

新中間層の家庭は、家業という生産手段を持たないため、子どもの教育には熱心にならざるを得なかった。飲食費や被服費を切り詰めるのだが追いつかない。そこで、支出抑制策のひとつとして打ち出されたのが、女中の廃止であった。当時の女性向け雑誌には、「女中をやめてういた費用の使いみち」(『婦人之友』1917年7月号)、「健康的な女中なしの生活」(同、1918年7月号)、「女中を廃して自ら働く主婦の経験」(『主婦之友』1919年7月号)など、女中廃止を奨励するような記事がしばしば掲載されている。しかし、主婦があまりに多忙になっては、買い物にも出られず御用聞きの手を借りる高くて粗悪な品で済ませばならなかったり、手がないため再利用されるはずのものもそのままになってしまったりして、かえって無駄な費用がかかってしまうことも少なくなかった。“女中払底”に追い打ちをかける“生活難”。そんな社会情勢から生まれたのが次に述べる「派出婦会」である。

2. 2 派出婦会の誕生

1918（大正7）年9月6日付の週刊『婦女新聞』は、「婦人共同会——派出婦を出す」という見出しで、派出婦会が設立されることを伝えた。「派出婦」に関するもっとも早い報道のひとつとして、その全文を掲げておこう¹³⁾。

四谷南伊賀 23 婦人共同会にては、従来の事業の範囲を広め、新たに河口愛子女史を顧問として、一般家庭に対する家事の整理、会員の制作品販売、廃物利用の研究、その他家事に関する凡ての相談相手となる一方、その求めに応じて、派出婦なるものを出すとの事になるが、会主大和俊子女史の談によると、「この頃社会の事情から中流の家庭で女中を廃する方が多くなりましたが、しかし主婦自身だけでは手も廻り兼ねる場合も少なくありません。そこで私達は最も簡単な需要供給の方法によって派出婦なるものを置いて、随時その需めに応じようというのであります。つまりお客膳・家庭宴会などには料理婦、衣服夜具類の仕立て及び直しもの並びに洗濯には裁縫婦・洗濯婦（洗い張り、染物、汚点抜きも取り扱います）、式服着付・外出化粧等には美容婦というように、それぞれ専門の者を派遣するのです」。

同年 10 月号の雑誌『婦人之友』では、「家庭の手不足を補うための派出婦会」という見出しで、婦人共同会の新規事業である派出婦の派遣について、仕事の種類や内容、賃金などより具体的に紹介している¹⁴⁾。

洗濯さえしてくれる人があれば、女中がなくてもよいけれどと思っている家もあり、ふだんは女中なしで済むけれども、子供が風邪でも引くと早速困ってしまう。お産の時に困る、お客のときに困る、留守番に困る、あれに困るこれに困るで、とうとう女中がいるようになったり、1人では少し手が足りないと思うと、つい2人にしなくてはならなくなったりします。様々な場合に家庭の手伝人を派出する所が必要だといろいろな方にお話していましたが、大和俊子さんは今度、河口愛子さんのご賛成を得て、いよいよ（1918 年——引用者）10 月から出来るだけ皆様のお申し込みに応じて、次のような種類の手伝い人を派出することになりました。派出婦の種類は六種に区別されています。

◆料理婦 ◆裁縫婦 ◆洗濯婦 ◆雑用婦 ◆給仕婦 ◆美容婦

◆「料理婦」というのは、和洋の料理法を一通り心得ている者で、お客膳、家庭宴会料理等を調理するもの。報酬は一度が 1 円内外。

◆「裁縫婦」は、縫い物の種類及び布の品質によって、一日の報酬は 60 銭、70 銭、80 銭の三種。

◆「洗濯婦」は、木綿物なれば 10 枚まで 30 銭、絹物もその品質によって、相当の洗濯料を申し受けること。張り物、しみ抜きもできます。

◆「雑用婦」は、日給が 40 銭、50 銭、60 銭の三種に分かれています。留守番等をお頼みになり

「派出婦」の登場

たければ、雑用婦の中から年取った未亡人などを派出したいつもりです。ご病人のお世話には一通り看護法を心得ている人を差し上げます。

◆「給仕婦」というのは、和洋の礼式を一通り心得ている者で、家庭で宴会等を開くとき、和洋室内の装飾から宴会に出て給仕をします。報酬は一度が1円以上。

◆「美容婦」は、化粧法及び式服の着付法等、一通り心得ている者で、化粧ばかりならば一度が50銭以上、化粧及び着付一切ならば3円以上5円まで。

これら2つの引用文からもうかがえるように、婦人共同会の「派出婦」派遣においては、申し込み者の依頼内容に応じて、同会が適任者を送り出すしくみ。とくに、料理、裁縫、洗濯など仕事を限定して、その方面に熟練した者を派出しようと考えていたことがうかがえる。

『婦人之友』の主宰者である羽仁もと子がかねてより、満足に教育も受けていない娘たちを女中として雇い入れることを問題視していた。1907(明治40)年には、編集にたずさわっていた雑誌『家庭之友』において、女中を養成する学校をつくり、貧しい家庭の娘たちを中心に一定の期間、家事に関する技術や知識を教え込んだうえで、女中を必要とする会員の家庭に臨時の女中として派遣することを提案した。彼女は、臨時女中の利点について次のように述べている¹⁵⁾。

もしも下婢(女中のこと——引用者)学校が我々の家庭の申し込みに応じて、臨時に下婢を派出してくれますならば、1週に1度とか月に2度とか日をきめて下婢の派出を請い、大きなものの洗濯を頼むとか、家内に風邪引きでもあるとか、客をするとか泊まり客でもある時は、1日でも2日でも3日でも、また半月でも臨時に直ちに下婢を雇うことが出来るので、平日は下婢なしでよいけれども、一寸忙しいことがある度に事欠くので、やはり下婢を置かねばならぬというような家は、たしかにその常雇いの下婢をやめることができ、2人まではいらなくても1人にしておくと、子供が少し病気でも直きに困って仕舞うからという如き事情のために2人にして置く家が随分沢山あるのでありますが、そういう家は安心して女中を減らすことが出来ましょう。

雇う側には、必要以上の女中を置く不経済を改め、身元と性質のわかった素養ある女中を選ぶことができる。雇われる側にとっても、家事を習得できるうえに仕事も紹介してもらえる。臨時女中の派出は労使双方にとってメリットがある、と考えられていた。婦人共同会による「派出婦」の派遣事業は、この羽仁もと子の案をヒントに、イギリスの期間限定つきの女中やアメリカの部分的労働^{ビースワーク}という仕事を限定して雇う臨時の女中のシステム¹⁶⁾などを参考にしてつくられたと思われる。

『日本労働年鑑大正11年版』には、「東京市内の女中派出所」として、婦人共同会がおこした派出婦会(=婦人共同派出所)の会規が掲載されている。具体的な活動内容を示すものとして、その一部をあげておこう¹⁷⁾。

◆本会は婦人共同派出所と称し、大正7年10月1日創立いたしました。

◆派出婦を差し上げました時は、1回の手数料金20銭を申し受けます。

「派出婦」の登場

- ◆派出婦は臨時のお手伝いを本文と致します故、1期を2週間と致してあります。引き続きご入用の節は、改めてお申し込み下さいませ。派出手数料は1期毎に頂戴致します。
- ◆派出婦は通勤と住み込みの2種致してあります。通勤時間は夏季、冬季にて多少の差がありますが、午前7時から午後7時と致してあります。
- ◆毎週火曜・日曜午後8時より9時半まで、派出婦の精神修養のため本会へ四谷教会牧師来会伝道が御座います故、恐れ入りますが、ご同情下さいましてこの時間だけ派出中の者を会へお遣わし下さいますようお願い致します。

派出料

- 一、保母兼家事取締婦（高女卒業以上の学力有する中年以上堅実の婦人）

1日分 1円50銭より2円まで

- 一、給仕婦（ご婚礼、法事、ご家庭の小宴その他のご給仕）

同 3円より3円50銭まで

- 一、雑用婦（ご家庭のご雑用一切）

同 70銭より1円20銭まで

- 一、特別雑用婦（午前9時より午後4時まで）

同 50銭より70銭まで

- 一、病産婦付添婦 同 1円より1円50銭まで

- 一、裁縫婦 同 80銭より1円20銭まで

この規定をみると「派出婦」が、①契約にもとづく臨時雇いである点、②住み込みのみならず通勤も認めている点、③勤務時間があらかじめ決められている点などが明確になっている。また、派出婦の種類が整備され、「料理婦」「美容婦」がなくなった代わりに、設立当初は1本であった「雑用婦」が、短時間勤務や病産婦付添いに特化したものを含め3つに分かれている。これは、台所一切から掃除、洗濯など何でもこなす雑用婦の需要が高かったとともに、看護婦代わりに派出婦を望む家庭が予想以上に多かったからであろう。女中を廃して、代わりに派出婦を雇ったという東京市在住のある主婦は、そのメリットについて次のように述べている¹⁸⁾。

近頃は女中の払底と、お給金が高いのにと、どこの家庭でも悩まされているようです。しかし、それかとても全く廃しすることも良し悪しで、そのため二六時中主婦が息つく間もないほど切り詰めた生活をして追いつかぬようでは、考えただけでゾッとします。私どもでは5人家族ですが、今年（1922年——引用者）の2月からいろいろの都合で女中を廃し、その代わりとして、派出婦の臨時雇いと苦学生の利用を考え出したのであります。派出婦は、お給金が高いので不経済のようですけれども、上手に使いますと、女中よりはかえって重宝のようです。第一通勤の派出婦を雇いますと、女中部屋というものが要りませんから、それだけでも、家賃が高いのに苦しめられている都会生活者には助かるわけです。ただいまでは毎週1回だけ、晴天の日に派出婦に通ってもらっていますが、主にお洗濯をさせています。また私は、ひと月に1回くらい欠かさず講演会

や展覧会などに出ることに決めています。この折にも派出婦を雇って、子供の守のかたがた留守番をしてもらっております。

雇う側にとっては、女中部屋もいらず、必要なとき必要なだけ使うことができ経済的なうえに、身元も会が責任をもってくれるので安心。いっぽう雇われる側にとっても、仕事の内容があらかじめ決められ“通い”も可能な派出婦は、生活難のなか、家計補助やちょっとした小遣い稼ぎとして魅力的だった。「自分の家庭の余暇に忙しい家を手伝おうという婦人もありますし、勤人等の奥さんが遊んでいる暇になったりするものも少なくなりません」¹⁹⁾と当時の新聞は伝えている。

第一次世界大戦後に誕生した派出婦会は、その後、女中不足を補う労働力として各地に広まり、大正末期には東京で派出婦の組合も設立された²⁰⁾。昭和初めには東京に200余、大阪に約30、京都・横浜・神戸・名古屋の各市に15～20カ所を数えるに至ったという²¹⁾。

3. 「派出婦」の実態

3. 1 派出婦のプロフィール

それでは「派出婦」とはいかなる属性をもった人で、どのような働き方をしていたのであろうか。1920年代から30年代にかけて、都市部を中心に派出婦会および派出婦を対象として調査がおこなわれている。ここでは、1922（大正11）年に東京市社会局がおこなった調査（以下、東京市調査）、名古屋地方職業紹介事務局が1932（昭和7）年におこなった調査（以下、名古屋市調査）、および横浜市社会課が1937（昭和12）年におこなった調査（以下、横浜市調査）の結果をもとに、派出婦のプロフィールをみていきたい。

【東京市調査より】

東京市社会局が、資本主義の勃興期に新たに誕生した各種の職業婦人の状況を調査したもので、調査結果は1924（大正13）年に発表された²²⁾。「派出婦」については、「第三編 附録」に「派出婦会に関する調査概況」として掲載されている。調査実施時期は1922年7月で、東京市22カ所の派出婦会に調査票を配布し、17カ所から回答を得た結果である。この調査は、「派出婦」に関する初めての本格的な調査といえよう。

1922（大正11）年当時、東京府下に派出婦会は24カ所あり、登録している会員（派出婦）数は約2000人。うち実際に働いていたのは半分以下の700～800人だった。「婦人共同派出国会」のように200人内外の会員数を有しているところも数カ所あるが、なかには会員数10人という会もみられ、30～40人程度のところが多かった。派出婦会は大半が個人経営で、派出婦から入会金として1円のほか、日給の10～15パーセントを手数料として徴収。なかには他に、毎月会費1円をとっているところもある。いっぽう、雇用主側からも、一期10日から2週間を単位として、一期間につき20～30銭の手数料をとるのがふつうだった。

「派出婦」の登場

会員の募集は新聞や雑誌などを通しておこない、入会を申し込んだ人のなかから派出婦に適した者を会員として登録し、需用者の家庭に会員のなかから派遣するしくみ。ただし、身体強健で相応の常識のある者という以外に、特別な条件をつけることはなかったようである。入会にさいしては履歴書、戸籍抄本、誓約書などの提出とともに保証人2人を立てさせるのがふつうだった。

派出婦の需給状況は、求人に対して求職が少なく、求人超過の状況にある。もっとも需要のあったのは炊事、洗濯、掃除などの「雑用婦」で需要の8割を占め、次いで「病産婦付添婦」。「裁縫婦」「家政婦」「給仕婦」などの需要は少ない。勤務時間は朝6時から夜7時まで。雇用主は通勤より住み込みを希望しているため、大半が住み込みとなっている。以下、調査より派出婦の基本的な属性を列記しておこう。

- ◆出生地：ほとんど全国に渡っているが、東京がもっとも多く21.9%。次いで茨城、千葉、神奈川などの近県が続く。
- ◆年齢構成：1243人中「20歳未満」3.3%、「20代」45.2%、「30代」47.2%、「40代」4.2%。30代以上が半数を占める
- ◆配偶関係：回答のあった935人中、有配偶者は24.2%である。ただし75%の独身者のなかには、離婚した者、死別した者がかなり含まれる。
- ◆教育程度：「義務教育修了程度」78.7%、「高等女学校卒および中退」20.0%、「不就学」1.3%。大半は尋常小学校卒業者である。
- ◆前職：派出婦になる前の仕事としては「女中」が多い。
- ◆収入：日給は、「雑用婦」(80銭～1円30銭)、「病産婦付添婦」(1円30銭～1円50銭)、「家政婦」(1円51銭～2円)、「裁縫婦」(1円10銭～1円50銭)、「給仕婦」(3円～4円)。最低80銭から最高4円とばらつきがあるが、平均は1円を上回る。住み込み・通勤にかかわらず、食事や往復の電車賃は雇い主が負担。会への手数料を差し引くと、手取り月収は平均で23～24円になる。

参考までに、同調査報告書の「女工に関する調査概況」²³⁾における女工の収入をみよう。日給ベースを10時間労働に換算した平均月収は、紡績工場25.2円、機械工場28.2円、化学工場22.6円、官営工場30.7円などで、平均は26.2円であった。女工と比較した場合、派出婦の平均手取り23円はとくに低いとはいえない。

【名古屋市調査より】

1933(昭和8)年発表された名古屋地方職業紹介事務局『家政婦調査』は、名古屋市内の全家政婦会(＝派出婦会)およびその会員(派出婦)を対象に実施したものである²⁴⁾。調査は1932年11月、自計式アンケートのかたちでおこなわれ、事業所(家政婦会)27カ所、会員は579人に調査票を配布、うち事業所は27カ所すべて、会員のほうは520人より回答が寄せられた。事業所のみならず、会員みずからにも調査を実施した点が、東京市調査とは異なる。

①事業所調査

1932(昭和7)年11月現在、27事業所のうち1カ所が休業中で、26カ所が営業している。創業の

「派出婦」の登場

もっとも古いのは1922年8月、最近のは1932年7月で、多くの会は1928年以後に設けられたものである。

会員数は「10人以上30人未満」が11カ所でもっとも多く、次いで「10人未満」7カ所、「30人以上50人未満」3カ所。150人以上の会員を抱えるのは1カ所にすぎず、東京市調査と同じく、小規模経営の事業所が大半を占める。会員の募集は、新聞広告によるものがもっとも多く、次いでビラ配布。入会にさいしては身元引受証の提出を求め、未成年の者は親権者の、有配偶者については夫の承諾が必要としている。他に自筆の履歴書、戸籍謄本を出させる会もあった。また、前職が芸妓や酌婦の場合は入会を許可しない会²⁵⁾が19カ所みられた。

業務の種類は、雑用婦、裁縫婦、病産婦、附添婦、家政婦、接待婦、事務婦の7種類。「雑用婦」はすべての会で取り扱い、次いで「病産婦」21カ所、「附添婦」20カ所、「裁縫婦」15カ所、「接待婦」11カ所、「家政婦」9カ所の順で、「事務婦」は1カ所しか扱っていない。料金は業務の種類によって異なるが、ふつう1日1円。1日の最高は「接待婦」の3円、最低は「雑用婦」の50銭である。

②会員調査

いっぽう、派出婦520人のおもな属性は以下のとおりである。

- ◆出生地：愛知県がもっとも多く60.2%（うち名古屋市内37.9%）。次いで岐阜県（10.6%）、三重県（8.8%）が続く。
 - ◆年齢構成：「20歳未満」2.2%、「20代前半」16.9%、「20代後半」19.0%、「30代」30.4%、「40代」21.3%、「50歳以上」8.9%で、30代以上があわせて6割近くを占める
 - ◆配偶関係：未婚者は20.6%にすぎず、配偶者があるか、過去に配偶関係にあった者が大半を占める。内訳は離婚した者が34.0%でもっとも多く、有配偶者27.1%、死別した者26.2%である。
 - ◆教育程度：「尋常小学校卒業」が46.5%でもっとも多く、以下「高等小学校卒業および中退」（37.3%）、「尋常小学校中退」（6.7%）、「高等女学校卒および中退」（5.6%）、「不就学」（3.3%）の順で続く。大半は義務教育修了の程度である。
 - ◆前職：前職のないものが全体の6割を占める。前職がある者では「女中」が多い。
 - ◆派出日数：最近1カ月の延派出日数は「15～19日」が20.8%でもっとも多く、以下「10～14日」16.5%、「20～24日」16.0%と続く。「25日以上」派出されている者が15.7%みられる一方で、「1～4日」または「なし」という者もあわせて14.7%ある。派出日数は年齢の若い者ほど多く、有配偶者より未婚者・離死別者のほうが多い。
- なお、会員調査では派出婦という仕事についての意見や感想を書く欄を設けている。回答者の自由記述から、派出婦として働くメリットについて述べたものをいくつかあげておこう。
- ◆主人もあり子どももある身をもって勤務いたすのですが、幸いに次のお宅へかわる間の幾日かのお休みを利用して、私用を達しつつ勤めています。〔有夫、子どもあり〕
 - ◆主人の留守中につき、毎日遊んで暮らすより多少のお小遣いでもと思い、派出婦となって働いております。〔有夫、子どもなし〕
 - ◆主人の死後、家にもずいぶん用事もありますので、何ヶ月も引き続くつとめはかえって不自由を

「派出婦」の登場

感じます。派出婦は臨時の仕事ゆえに真に結構に存じます。〔死別、子どもあり〕

◆派出婦は何ヶ月と定まって束縛されませんから、暇な折には家事のお手伝いも出来まして誠に好都合だと存じます。〔未婚〕

特別な知識や技能がなくてもすぐに働くことができ、比較的高齢でも可能。自分の生活とも調和がとりやすい。派出婦として働くメリットはそんなところにあるようだ。

【横浜市調査より】

横浜市社会課が1937（昭和12年）9月、市内にある派出婦会および家政婦会に登録する会員すべてを対象に実施したものである²⁶⁾。この調査では、調査員が対象者にを訪問し面接するかたちでおこなわれ、693人より回答を得た。本調査は対面式の聞き取りのため、調査はかなり細かい点にまで及んでいるのが特徴である。

調査当時、横浜市内には私設の派出婦会15カ所と公設の家政婦会5カ所があり、会員数はそれぞれ356人、337人と相半ばしている。私設のものは入会金1円、毎月の会費として仕事の有無に関せず50銭、他に月収の25%を手数料として徴収するのが一般的。いっぽう公設のものは、手数料（月収の5%）のみで、入会金や月会費は徴収しない。基本的な属性は以下のとおりである。

- ◆年齢構成：「20代後半」が20.6%と最も多く、以下「20代前半」（16.3%）、「30代前半」（16.0%）、「30代後半」（14.0%）、「40代後半」（12.7%）、「40代前半」（8.7%）と続く。「20歳未満」の者はわずか1.9%にすぎない。
- ◆配偶関係：未婚者は34.2%と全体の3分の1強にとどまり、結婚の経験のある者（有夫24.7%、離別14.8%、死別26.4%）のほうが多い。
- ◆教育程度：「尋常小学校卒業」（45.0%）が最多で、これに「高等小学校卒業および中退」（37.1%）を加えると、小学校程度の者は8割を超える。これに対して中等学校（高等女学校、実業学校、補習学校）の卒業・中退の学歴を持つ者は1割にとどまる。「尋常小学校中退」と「不就学」者はあわせて7.5%であった。
- ◆前職：8割は前職なし。ある者では「女中」が多い。
- ◆通勤形態：住込・通勤の点からみると、全体の90.3%が住み込みで通いは少数である。
- ◆派出日数：前月（8月）の派出日数は「20～24日」が24.0%でもっとも多く、以下「30,31日」（19.8%）、「16～19日」（19.3%）、「25～29日」（15.4%）、「1日も就労していない」（15.3%）と続く。月に25日以上働く者が全体の3分の1を占める。
- ◆収入：日給は「80銭」という者が全体の51.5%を占め、次いで「1円」（29.9%）がこれに次ぐ。前月の収入は「15円以上20円未満」が26.6%と最も多く、次いで「20円以上25円未満」の18.5%。「30円以上35円未満」の者はわずか1.6%にすぎない。
- ◆派出日数：「26日以上」が「16～20日」が28.3%でもっとも多く、以下「16～20日」（19.3%）、「21～25日」（16.5%）と続く。いっぽう「1日も就労していない」者も106人（15.3%）みられる。
- ◆就労理由：派出婦として働く理由は、「家計扶助」が39.7%でもっとも多い。以下「自活の道」（24.2%）

「派出婦」の登場

「嫁入支度」(17.6%)、「家族扶養」(17.5%)の順となっている。

横浜市社会課は同じく1937年、市内の「住み込み女中」約6千人に対しても調査²⁷⁾をおこなっている。表2は、年齢構成、配偶関係、教育程度、収入(月収)、就労理由について、派出婦と女中を比較したものである。

表2 「派出婦」と「女中」の比較 (単位：%)

項 目		派 出 婦	女 中
年 齢 構 成	20歳未満	1.9	40.1
	20～24歳	16.3	43.5
	25～29歳	20.6	7.1
	30～39歳	30.0	3.5
	40歳以上	31.2	5.8
配 偶 関 係	未婚	34.2	90.4
	有夫	24.6	2.9
	死別	14.8	2.8
	離別	26.4	3.9
教 育 程 度	尋小中退・不就学	7.4	6.8
	尋小卒業	45.0	43.9
	高小卒業・中退	37.1	42.2
	中等学校以上	10.5	7.1
収 入 (月)	10円未満	14.3	48.8
	10円以上15円未満	15.0	41.9
	15円以上20円未満	31.3	4.8
	20円以上	39.4	0.8
	無給、給料未定	—	3.7
就 労 理 由	家計扶助	39.7	24.6
	家族扶養	17.5	2.9
	自活の道	24.2	11.1
	嫁入支度	17.6	31.8
	不時の準備	1.0	1.4
	修養	—	28.2

注：女中の「収入」は前借、年給の者を除いて、派出婦の「収入」は1日も派出していない者を除いて算出した。

資料出所：横浜市社会課『昭和十二年度 派出婦調査』および『昭和十二年度 女中調査』1938年より作成

教育程度については、「派出婦」「女中」ともに、尋常小学校卒業程度の者が多い。しかし、その他の点では明らかに違いがみられる。すなわち、「派出婦」の6割が30歳以上で未婚者は3人に1人にとどまっているのに対し、「女中」の8割以上が10代～20代前半で、しかも9割は未婚者。また、収入においても、「派出婦」は約4割が20円以上であるのに対し、「女中」の9割は月に15円未満である。さらに、就労理由をみても、「派出婦」では家計扶助や自活の道、家族扶養のために働く者が半数を超えるのに対し、「女中」では嫁入支度や修養が6割を占める。要約すれば、「女中」が〈若年未婚者の結婚準備型の仕事〉であるのに対し、「派出婦」は〈中高年既婚者を中心とした家計補助型の

仕事」といえよう。

大阪にある朝日婦人会が1927（昭和2）年に発行した『家政婦になる人と頼む人の必読書 家政婦の栞』によれば、派出婦の多くは「不幸不遇な境遇の人」であり、「一時の不幸から逃れ一時の急に処する」ために働いているという²⁸⁾。離婚や死別により生活費を稼がなければならない。夫の病気や失業のため家計を支えなければならない。商売の失敗や借財の返却のために追加収入が必要になった。こうした家庭の事情を抱える人びとが、ただちに就職できて、収入も内職よりよいということで、派出婦になったと思われる。

3. 2 「派出婦」をめぐるトラブル

各地に派出婦会が誕生するにつれて、派出婦をめぐるトラブルも増える。派出婦会の大半は、民間業者による小規模経営。誇大広告により会員を募り、ピンハネなどによって立場の弱い労働者を苛酷な状況に貶めさせることも少なくなかった。たとえば、1929（昭和4）年8月号の雑誌『婦人運動』には、悪徳派出婦会のケースが紹介されている²⁹⁾。

最近、警視庁は市郡を通じ約250の派出婦会の内容を一齐に調査したところ、一部の不良派出婦会が不景気な結果、正常な方法では儲からぬのでむやみに会員の増加を計り、その入会金（普通1円内外）と会費（1カ月1円程度）を多数の入会金から搾り取るという手段に出ていることをつきとめた。馬鹿をみるのは入会者で、せっかく働かしてもらおうと思ってなけなしの財布をはたいて入会金やら会費やら納めると、働く日は月のなかに2、3日から4、5日ぐらいでどうにもならなくなって退会する。会の方ではそんな事に頓着なく、これ幸いと百人でも二百人でも、あとからあとから新入会員を募集するという段取りであったのである。

派出婦会は、その大半に寄宿所が設けられており、入所者は寄宿費として月1円から1円50銭を支払う。自活するには少なくとも20円以上稼がなくてはやっていけない。しかし不況下で仕事は少なく、会費や寄宿費を納めるのが精一杯という会員も多かった。

1927（昭和2）年1月からは「営利職業紹介事業取締規則」（内務省令第30号）が実施され、営利を目的とする紹介事業はすべてこの規則の下におかれることになった。その結果、派出婦専門でない雑多な仕事を扱う業者からの派出が増え、派出婦の紹介が乱雑になった。女中が派出婦に早替わりしたり、派出婦が女中になったり女給になったり、なかには売春婦として派出されることもあったという³⁰⁾。

1933（昭和8）年5月号の『婦人公論』には、女学校卒業後に派出婦になるため上京したところ、入会した派出婦会がじつは売春専門の斡旋業者だったという女性の手記が掲載されている³¹⁾。その一部を紹介しておこう。

「独力ヲ以テ成功セントスル自覚女性ハ来レ。衣食住総テ当方負担ニテ、最低月収50円以上ヲ保証す。容姿十人並。特ニ地方出身ノ方歓迎！ 東京市本所区××町××番地 城東家政婦倶楽

部(仮称)」。そう云う広告文が、やっと女学校を卒業したばかりの、山里の十九娘をば、まるで天国からの招待状のような魅力でひきつけます。私もまた、そういう山里娘の一人でした。……

(中略)……巷間一般の家政婦事業というものがどの程度まで「家政婦」を実行するものか知りませんが、ともかくこの倶楽部(=派出婦会——引用者)では、目的を完全に日雇い売笑婦という点においた——中肉中背のがよいなどと条件を付帯してくるものさえありました。この前のような痩せっぽちでなしに今度は少しぶよぶよ太ったのがほしい、などと注文してくるのです。そこで部長(会の責任者——引用者)商品値段を予約して、注文者の希望に添う部員をさし廻す仕組み(下略)。

売春目的の派出婦会が横行していたことは、先述の名古屋市調査の自由記述からもうかがえる。「家政婦会の内には暴利のため淫売的婦人を集め、待合又は旅舎に派遣せしめ風紀を乱すものあり。ために求人信用を損するのみならず、社会的害毒を与うるものあり」(事業所調査)。「派出婦としては私は恥ずかしくない仕事と思いますが、他にエロ家政婦があるとの事。其の人たちと同一人に思われるのが真に残念です。どうかそういうのがあったらどしどしと取締まって下さい」(会員調査)。「世間は我々老人に対してさえも家政婦という色眼鏡で見られる事が誠に心苦しいと思います」(会員調査)。「万人のほとんどは一種の疑惑の目で見たり、はては売娼婦扱いにする事を残念に思います」(会員調査)というような苦情の声が多数寄せられている³²⁾。いっぽう、派出婦を利用者する側からはしばしば、「貴会には男子の旅行に附いて行く家政婦はいないのか」「宿屋に宿泊中、男子の身の回りの用事をしてくれる家政婦はいないのか」などの問い合わせがあったという³³⁾。

また、個人の家庭に臨時で派出されるということから、派出婦には誘惑の機会も多かった。当時の職業案内書の「派出婦」の項には、「会の中にいかがわしいのがあって徒らに手数料を食ったり、甚だしきは雇い入れ申込人と結託していかがわしい周旋までしかねまじきものがありますから、よほど注意が必要です」(日本職業調査会編『女が自活するには』1923年)、「中央部の堅実な会へ入会すると、自然、派遣先もよく、間違いがありません。場末の会へ入会すると、派遣も悪しく、思わぬ間違いの出来ることもあります」(増尾辰政『婦人の職業』1928年)、「相当誘惑の多い職業であるから、相当に意志の堅固なものでなければ勤まらない」(豊原又男『女子新職業読本』1938年)などの記述がみられる。派出婦会によっては、男ばかりの世帯には住込みでは派出させない。男性と子どもだけの世帯には年輩者を派出する、などの内規を設けているところもあった。

さらには、家庭からの申し込みの条件と実際が異なることも珍しくなかった。10人位の家族の炊事というつもりで行って見たら15人以上であるとか、夫婦世帯のはずが妻がいなかったとか、ちょっと風邪引きと聞いていたのにじつは肺結核だったなど。そんな場合には、派出婦を交代させたり引き上げさせたりするのが一般的だったが、雇い主が納得せずトラブルに発展するケースもあったらしい。

くわえて1930年代に入ると、派出婦会の過剰で経営が成り立たなくなる事態も起こった。たとえば、1934(昭和9)年11月18日付『婦女新聞』は、「不振の派出婦会」という見出しで次のように報じている。「派出婦会はここ数年に新規開業続出し、現在東京には警視庁登録のものだけでも400会からある状態であるが、最近は営業著しく不振で共倒れの状態にあり、どうにか影響安定のものは20

分の1くらいであると」³⁴⁾。このように派出婦は見かけほどおいしい仕事ではなく、派出をめぐるトラブルも少なくなかったのである。

4. おわりに

以上、「派出婦」が登場した経緯とその実態について見てきた。第一次世界対戦後の女中払底と生活難を背景に登場した派出婦は、家庭の手不足を補う効果はあったものの、女中にかわる一大職業領域を形成するまでは至らなかった。払底しているとはいえ、農村出身者を中心に女中のなり手が少なくなかったからである。しかし、「派出婦」は〈女中〉のイメージに及ぼした影響は大きい。ここでは3つの点からみておきたい。

第一は、「派出婦」の登場により女中の“職業”という側面がクローズアップされたことである。その変化を如実に示すのが、女性向けの職業案内書であろう。すなわち1910年代までの案内書を見ると、「女中」は全く取り上げられていない。多くの女性が働いていたにもかかわらず、「女中」は職業としては認知されていなかった。それが1920年代、30年代に刊行されたものの多くには、「派出婦」とともに「女中」の項も設けられている。“新しい女性の職業”として派出婦が注目されるようになったことで、同様の仕事をしている女中にも目を向けざるを得なくなったのであろう。

日本の女中はもともと行儀見習や家事習得など“修業”としての性格を有していた。雇主と女中との関係は、対等な労働サービスの売買関係ではなく、働くものを人格も含めて身ぐるみ抱えこむ主従関係であった。これに対して「派出婦」は、労働の期間や勤務時間、仕事の内容などがあらかじめ契約により決められるという点で、また、住込みならず通いの形態も認めるという点においても、従来の女中とは大きく異なっていた。即戦力となる家事のプロを雇うのだから、そこには修業的な側面はない。主従関係から契約関係へ——。「派出婦」の登場により、“女中もひとつの職業”という意識が人びとのあいだに芽生えた。

第二は、“職業としての女中”という認識が生まれた結果、女中に対する社会的な関心が高まったことである。個人の家庭に住み込む女中については1910年半ばまで、待遇法や使役法などもっぱら家庭問題として扱われてきた。それが1920年代以降、社会事業や職業指導関連の雑誌では、日本の女中制度を紹介・批判する論文³⁵⁾がしばしば掲載され、女中に関する大規模調査³⁶⁾も各地でおこなわれるようになった。

関東大震災の翌年の1924(大正13)年10月、国民新聞社が「時間制女中問題」について投稿を募った。女中が嫌われる最大の理由、すなわち労働時間に定めがないという点に着目し、女中の仕事を時間制にしてみたらどうか、という提案をおこなったのである。寄せられた投稿をみると、女中の大半が時間制の導入に賛成なのに対し、雇主側には反対意見が多かった。おもな反対意見をみると「温情感化に優る女中難の緩和策はない」「家庭の仕事は細く長し。一定の時間に盛ることはできない」など、不規則・不合理な家庭生活を前提とし、「家族的美風の破壊」をあげたものが目立った。雇主側の多くは、相変わらず封建的な主従関係を理想としていたのである。いっぽう、女中たちの多くは、まとまった自由時間に夜学に通ったり気兼ねなく外出したいと希望していた³⁷⁾。このように両者の意

「派出婦」の登場

見は平行線をたどったものの、労使双方がいわば同じ土俵のうえで女中の待遇について意見を交わした意味は大きい。「派出婦」の登場は、女中の問題がひろく社会問題として意識される契機となったのである。

第三は、女中の問題が社会問題化するにつれて、行政の側も女中の紹介や保護、養成などの事業に関わらざるをえなくなったことである。たとえば、1932(昭和7)年12月25日付『婦女新聞』には、東京市が派出婦専門の紹介事業をスタートさせることを、次のように報じた³⁸⁾。

かねて計画中であった東京市職業紹介所派出部が開業して、理想的派出婦の世話をすることになった。これは現在の派出婦会、家庭婦人会等の弊害を一掃するためと、紹介所の申し込みに臨時手伝いの要求が相当沢山あるので、そうしたことから市社会局が考え出したこと。四谷区花園、芝区芝園、本郷元町の婦人少年職業紹介所の3カ所の市設紹介所で扱う。派出員は16歳より60歳までの婦人で、品行、身元は特に注意するよし。

派出婦をめぐるトラブルが頻発していることはすでに述べたとおりだが、東京市のこの試みには、悪質な業者を取り締まるだけにとどまらず、積極的によい派出婦を送り出そうという、行政側の対応の変化がうかがえる。同市では1939(昭和14)年、女中を対象とした寄宿補導所を開設し、通勤女中を養成する計画も立てている。100名程度の通いの女中を養成し、修了後もそのまま寄宿舎に収容して、昼間は女中として通勤し、夜は宿舎で一通りの作法や家事、お茶やお花などを学ぶ時間を与えて生活を楽しませようとする試み³⁹⁾。住み込み女中の養成・保護事業はすでに、愛国婦人会など一部の女性団体がおこなっていたが⁴⁰⁾、行政主導で100名規模の派出婦を養成するというのは初めてのケースである。手不足の家庭に質の高い家事手伝い人を派出する。創生期の派出婦会が企図したことを行政も、20年たってようやく着手したといえよう。

もっとも、こうした試みは戦時色が濃くなると立ち消えになった。軍事産業への動員もあつて対象となる女性が減るとともに、女中の雇用など贅沢という風潮が強まったからである。

そして戦後。1947(昭和22)年に施行された職業安定法は、限られた業務以外はいっさい労働者供給事業を禁止する立場をとった。そのなかで「派出婦」は1951(昭和26)年、「家政婦」という名で、有料職業紹介事業に認可された。その結果、先にスタートしていた「有料看護婦紹介所」の大部分が「有料看護婦家政婦紹介所」として兼業の看板を掲げた。そして高度経済成長とともに、家政婦の紹介所も増加していったのである。戦後の動向については、稿をあらためて論じることにはしたい。

〔付記〕

本稿は、2002年5月26日の第53回関西社会学会大会(於・京都光華女子大学)でおこなった研究報告を加筆修正したものである。

注・引用文献

- 1) 清水美知子:「〈女中〉イメージの変遷」『近代日本文化論』第8巻, 岩波書店, 2000, 同:「戦前

「派出婦」の登場

期の『婦人之友』誌にみる女中像の展開——〈お手伝^{てつだい}〉の登場をめぐる『生活学論叢』第4号, 1999, 同:『『婦女新聞』にみる女中問題の変遷』『関西国際大学短期大学部研究紀要』第13号, 1998 など

- 2) 下田歌子:「女中も悪いが主人も間違っている」『婦人世界』第8巻 第12号, 1913
- 3) 下田歌子:『新撰家政学 下の巻』1900, 金港堂, 同:『婦女家庭訓』1907, 博文館など
- 4) 「下婢の欠乏」『家庭雑誌』第71号, 1994, 「下婢の払底」『女学世界』第1巻第14号, 1901 など
- 5) 東京市社会局が1935年, 市内の女中約1万人を対象におこなった調査によれば, 就職の経路としては「知己関係の紹介」が全体の8割を占め, 次いで「口入屋の周旋」(14.5%)。「公共職業紹介所の利用」はわずか5.5%にとどまった。東京市社会局:『東京市内の女中に関する調査』1936
- 6) 平塚らいてう:「現代婦人の悩み」『婦人公論』第3年 第1号, 1918, 30-31頁
- 7) 「女工と女中の争奪戦」『報知新聞』1916年11月27日付
- 8) 「女中の払底」『都新聞』1917年6月29日付
- 9) 伊東壮:「不況と好況のあいだ」南博編『大正文化』勁草書房, 1965, 183-187頁
- 10) 清水美知子:「戦前期の『婦人之友』誌にみる女中像の展開——〈お手伝^{てつだい}〉の登場をめぐる」『生活学論叢』第4号, 1999, 24頁
- 11) 『日本労働年鑑大正9年版』大原社会問題研究所, 1920, 『日本労働年鑑大正10年版』1921
- 12) 木村良:「行詰った減食」『教育時論』1918年9月25日
- 13) 「共同婦人会——派出婦を出す」『婦女新聞』第955号, 1918
- 14) 「家庭の手不足を補うための派出婦会」『婦人之友』第12巻 第10号, 1918
- 15) 「下婢学校の案」『家庭之友』第4巻 第11号, 1907
- 16) 生江孝之:「下婢問題の研究」『婦人之友』第6巻 第7号, 1912, 同:「女中の払底とその調節案」『婦人之友』第11巻 第7号, 1917 など
- 17) 「東京市内に於ける女中派出会」『日本労働年鑑大正11年版』大原社会問題研究所, 1922, 249-250頁
- 18) 「女中代わりに書生と派出婦を」『婦人世界』第17巻 第11号, 1922
- 19) 「婦人界の新職業 臨時雇の派出婦」『讀賣新聞』1920年1月27日付
- 20) 「派出婦連合組合」『婦女新聞』第1345号, 1926
- 21) 「派出婦の全国的統一を準備」『婦女新聞』第1513号, 1929
- 22) 東京市社会局:『職業婦人に関する調査』1924
- 23) 東京市社会局:前掲報告書, 1924
- 24) 名古屋地方職業紹介事務局:『家政婦調査』1933
- 25) 芸妓や酌婦だった者の入会を認めないのは当時, 「派出婦=いかがわしい仕事をする人」と色眼鏡で見る人が多かったためである。
- 26) 横浜市社会課:『昭和十二年 派出婦調査』1938
- 27) 横浜市社会課:『昭和十二年 女中調査』1938
- 28) 朝日婦人会:『家政婦になる人と頼む人の必読書 家政婦の栞』朝日婦人会, 1927, 35-37頁

- 29) 「派出婦会のカラクリと自治的派出婦会の提唱」『婦人運動』第7巻 第8号, 1927
- 30) 朝日婦人会：前掲書, 1927, 145 - 149 頁
- 31) 中村豊子：「不思議な派出家政婦の手記——都にあこがれて来る若き姉妹へ」『婦人公論』第18年第5号, 1933
- 32) 名古屋地方職業事務局：前掲報告書, 1933
- 33) 朝日婦人会：前掲書, 1927, 45 頁
- 34) 「不振の派出婦会」『婦女新聞』第1797号, 1934
- 35) 岩崎益子：「女中制度の改善について」『社会事業研究』第20巻 第3号, 1928, 梅山一郎：「我が国の家庭労働婦人の実状に就て」『職業指導』第2巻 第1号, 1929, 田中法善：「女中の社会的地位の問題と組合運動に就て」『社会福利』第19巻 第10号, 1931 など。
- 36) 社会立法協会：『女中に関する調査』1931, 大阪市社会部：『女中の需給状況について』1934, 東京市社会局：『東京市内の女中に関する調査』1936, 京都市社会課：『京都市に於ける女中に関する調査』1937, 横浜市社会課：『昭和十二年 女中調査』1938 など
- 37) 梅山一郎：「時間制女中に就て」『婦人と労働』第2巻 第8号, 1924
- 38) 「市で派出を世話」『婦女新聞』第1698号, 1932
- 39) 「通勤女中制度を——職業紹介所で計画」『婦女新聞』第2027号, 1939
- 40) たとえば, 愛国婦人会では1934年2月, 東京本所の本部隣保館内に, 農村出身者を宿泊させて女中としての準備教育をおこなう「女中養成所」を設立した。同会は1936年, 女中のための福利厚生施設も開設している。詳しくは, 清水美知子：「愛国婦人会の〈女中〉をめぐる社会事業」『関西国際大学研究紀要』第2号, 2001 を参照のこと。

参考文献

- 1) 木下省眞：『女子の新職業』内外出版協会, 1905
- 2) 日本職業調査会：『女が自活するには』周文堂, 1923
- 3) 佐瀬文哉：『文化的婦人の職業』自光堂, 1924
- 4) 増尾辰政：『婦人の職業』1928
- 5) 大阪市社会部『派出婦及附添婦に関する調査』1930
- 6) 婦人職業研究会：『小学校卒業の女性のための女子就職の手引き』三友堂書店, 1934
- 7) 豊原又男：『女子新職業読本』日本放送出版協会, 1938
- 8) 山口（清水）美知子：「近代日本における〈女中〉像の変遷——明治・大正期の婦人雑誌を中心に」『大阪薫英女子大学研究報告』第25号, 1990
- 9) 篠塚英子：『女性が働く社会』勁草書房, 1995
- 10) 小山静子：『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房, 1999

Abstract

This paper examines the image of the *jochu* (housemaid) in Japan between the two World Wars, with a focus on *hashutsufu*, female temporary workers who were engaged in household work.

After World War I, urban areas experienced a severe shortage of housemaids. Housemaids were hard to find, and even when they were found, it was hard to retain the employment relationship. To address this problem, a system of visiting housekeepers called *hashutsufu*, was set up. In 1918, The Visiting Housekeepers' Society was established in Yotsuya, Tokyo, and housekeepers were dispatched according to the requirements of the clients. Though they were paid better than traditional housemaids, they were hired only when needed. From the start, *hashutsufu* was popular, especially in urban areas as a substitute for a regular housemaid.

Traditionally, being a housemaid meant serving a kind of apprenticeship to learn manners and housework. However, since *hashutsufu* had fixed periods of employment with the agreement on job description and working hours reached beforehand, there was no sense of apprenticeship. And this move from a master-servant relationship to a contractual relationship allowed *jochu* to make the first step toward being considered a conventional type of employee.